

この地に福音が満ちるための伝道ジャーナル

新春特別号

リバイバル・ジャパン

2009.1.1

REVIVAL JAPAN

¥380

新春対談

ビジョンは必ず実現する

池田博 VS 千田次郎

特集 宣教的教会を考察
宣教セミナー「カイロス」
主婦がアイデア商品を寄贈

「まずは、これまでの伝道・牧会を振り返っていただけたらと思いますか。」

千田 多くの神学校でそうだと思うのですが、伝道に関してはあまり具体的なことは学びません。そこで、私が牧師になった年の牧会理念は、「何でもやる」(笑)。下手な鉄砲も数打ちや当たると、思いつくことは何でもやりました。1年目で全部やって、秋が終わる頃には種切れ。しかし、「幻なき民は滅びる」とありますので、神様からビジョンを頂かなければどうにもできない、と考え、3年目に2泊3日の「夢と幻を語る会」を開きました。これが大きな祝福となりましたね。将来、理想的な教会になっていく、という思いを持って教会員みんなで自由に話し合い、楽しい時を過ごしました。それで当時の福田町キリスト教会の「福田町ビジョン」ができました。

もう一つ、牧師になった年に、具体的にどうやって信徒一人ひと

新春対談

難しいと言われる日本宣教の現場で確実に実を結んでいる牧師たちがいる。共通するのは明確なビジョンを持っていること。都会と田舎の双方で働きを進め、それぞれの使命を全うしている池田博牧師(JECA本郷台キリスト教会)と千田次郎牧師(恵泉キリスト教会)が、日本宣教の可能性を語り合った。

ビジョンは必ず実現する

どいすよね。そして、リーダーシップのある人に限って都会に出て行きます(笑)。

でも、これがかかりしていたら損なので、これを恵みとして受け止めると決めました。そういう目で聖書を読むと、「初代教会は迫害で散らされ、主イエスの証人となって各地域に散らされている。これは当たり前なことなのだ」と改めて理解できて、訓練して積極的に送り出す、という考え方に変わりました。すると、出て行った人数分、いやそれ以上に人が増えていったのです。そして、そのサイクルが進んでいって礼拝が60人になったとき、春に20人を送り出しました。みんな素晴らしい人たちでした。さすがにその年は1年では挽回できなかったけど、素晴らしい機会ともなりました。ちょうど、その3ヶ月ほど前にジョセフ・ミコ宣教師が首都圏で開拓伝道を始め、協力者がいなくて困っていた時に、うちから出た15人ほどが送り込まれたのです。彼らのうちの1人が、「僕



本郷台キリスト教会
主任牧師

池田 博氏

りを建て上げていけば良いかを考えていた時、山形県の霊的リーダーだった陶山節子先生がアメリカ、ブラジルの伝道旅行を終えて帰ってこられたんですね。そして、「みなさん、アメリカの教会では教会学校は子供たちだけじゃないのよ。大人も学んでいるわよ」と熱く語ってくれたのです。それが私への神様からの答えでした。そして礼拝後、分級に分かれてウェストミンスター小教理問答を小グループに分かれてコッコツと学んでいきました。これで信徒が目覚めて自発的に聖書を学ぶようになり、確実に教会が成長していくようになりました。

池田 私の場合、横浜の郊外に1969年に遣わされました。3年ほど宣教師が伝道した場所でした。宣教師が帰国する際に日本人の牧師が必要となり、私が行くことになったのです。当時は10人ほどが集っていました。半分が信徒で、あとは求道者。彼ら一人ひとりとはとても貴重な存在でしたが、宣教師に育てられると宣教師が何でもやってくれるため、自分たちが牧師給を賄わなければいけない

これが至上命令。それが良かったと思いますね。

池田 なるほど、教会が神学校の役目も果たしたんですね。私は、赴任した年は良かったのですが、その後が厳しいところを通らせられました。2年目からは、ほとんど人が救われない。特伝で多少人が集まっても残らない、根付かない。その後の4年間で受洗者が1人か2人でした。自分では「主

という意識はありませんでした。そして私自身も、その宣教団体から教会堂、牧師館、牧師給などの7、8割を援助されながら伝道したわけで、アルバイトもしなくてよかった。しかし結果的には、私の伝道に対するスピリットがそがれてしまいました。おんぶに抱っこで、知らず知らずのうちに甘えの体質が根付いてしまったのです。それでも1年目に5人の受洗者が与えられ、大きな励ましでした。

千田 清水寛牧師が土台を据えた山形県米沢市の教会に遣わされたのですが、赴任当時の礼拝は20人ほどでした。しかし、春になると5、10人が就職で外に出て行く。大学生は卒業と同時にほとんど出て行きます。地元にも働く場所がないから彼らの気持ちもよく分かるのですが、牧師としては結構しん

からの召しを受けて遣わされたはず、1年目はできたじゃないか」と思うのですが、やってもやっても成果が現れないのです。

そんな中、大切に導いた1人の青年が洗礼直前まで行きながら洗礼を受けなかったことで、すっかり自信を失ってしまいました。そしてある日の礼拝で、「私はもう限界です。牧師を辞めさせていただきます。今後についてはみなさんでよく話し合ってください。みなさんでよく話し合ってください。みなさんでよく話し合ってください。」と宣言してしまっただけです。教会員の皆さんはボカンとしておられました。

そう言っただけで沈黙していると、1人の80過ぎのおばあちゃんが声を発しました。「先生はまだお若い。これからです。私たちも祈ります。ですから頑張ってください。よろしくお願いします」と。彼女は祈りの人で、筋金入りの信仰者でした。私には、そ



恵泉キリスト教会
バルナバ牧師

千田次郎氏

Profile ちだ・じろう

1938年、岩手県生まれ。聖書神学卒業。1966年、山形県米沢市の福田町キリスト教会(後の恵泉キリスト教会)の牧師となり、現在に至る。恵泉キリスト教会は、「恵泉ビジョン」のもと13のチャペルを生み出し、宣教活動を展開中。現在、理事を務める日本教会成長研究所(JCGI)では全国講師として活躍。また、アジアネットワークによる教会間では、バルナバ役として奉仕している。

Profile いけだ・ひろし

1937年、東京都生まれ。ホーリネス派又キリスト教会にて受洗。東京聖書学院卒業。1969年に本郷台キリスト教会の伝道を開始。主のために始めた商品回収を18年間行い、開始4年後に会堂建設。地域に根ざした教会伝道を目指し、「愛が結ぶ教会」がモットー。著書に「祈りは私を変え、教会を変え」、「幸せはどこに」(いのちのことば社)などがある。

の一言一言が何かに染みとおつて来ましてね。どんよりと立ち込めていた重い雲がサーと消えていくような思いになりました。それで彼女の発言が終わったらスカッとしてしまって、「分かりました」と言ってしまった(笑)。ほんの数分間の一幕のドラマでしたが、私は鼓が破れて、そうだ、やれる、大丈夫だ、という思いが与えられたのです。

そこでまず、おんぶに抱っここの状態から自立しなくてはいいけない、そのため何でもやろうと決めて、ちり紙交換を始めました。これが私にとっては大きな転機にな



りましたね。町で直接人と接することができずし、賛美歌のテープを流しながら「ご町内の皆様、賛美歌でお馴染みのちり紙交換でございませう」とやりました。お客さんにはトラクトや信仰書も渡しました。そうやって自分の鼓が破られていきました。

千田 私は厳しい父親のもとで育ったので、年上の男性の前に出ただけで萎縮してしまいました。人付き合い自体が苦手でした。でも、学生たちなら接することもできると思い、20歳前後に絞って取り組みました。最初からターゲットを絞ったのです。その頃はプロテスト受験100年と言われていましたが、日本の宣教は、いかに多くのクリスチャンホームを生み出すかが鍵だと思っただけです。当時は、クリスチャンホームなんてほとんどありません。そこで、青年たちを救いに導き、素晴らしい家庭を築かせる。信仰を土台とした結婚をして、その時に異教的習慣や親との関係もはつきり整理させる。そして未信

危機は好機に変わる

者の親とクリスチャンの子供の世代が対等な大人の付き合いができるよう経済的にも精神的にも自立させ、クリスチャンホームを育てていく。そうやってクリスチャンホームが増えて、その家庭が次の青年たちの養いの場となって、良い結果を生んでいくことを目指しました。青年の救いとクリスチャンホームの確立、そこに焦点を当てたんですね。

池田 千田先生は着実に堅実に教会形成、信徒養成、弟子訓練を行われていて、いつも教えられています。私の場合、試行錯誤でできたようにも思いますが、遣わされた当初、教会形成の二つの柱を示されていました。一つは、地域に根ざして地域に仕える教会であること。もう一つは、世界に宣教師を送り出す教会であること。そのことがいつも折りのなかにあって、ちり紙交換をするなかで様々な人たちのつながりができました。そして数年したら、新興住宅街だったこともあり、PTA会長に推されました。会合も、トラッ

クにちり紙積んで学校に乗り込ん(笑)。ハードでしたが、地域に仕える道を神様が開いてくださったのだからできる限り活かそうと思い、結果的に3年間PTA会長を務めました。そして、お母さんたちとの接点を通して子供たちが教会に導かれるという道もできてきました。

千田 池田先生の歩みでいつも教えられるのは、地域とのコンタク

トを持って変革していく点。私もそういう視点をもっと早く取り入れておけば、もっと豊かな実を結ぶことができたように思います。私の場合、異教的な習慣が強いなかでしっかりと信仰を確立していくため、この世に対して対立的な思いを強く持ちすぎてしまったように思います。セパレーション(分離)とまでは言わないけれど、自分たちを清くしっ

かり保つということ、そういう日本の教会の性質が強かった。どちらかというと、自分たちを守っていくという意識が強すぎたかなと反省させられています。

池田 そこが都会と地方の違いじゃないでしょうか。都会は賛美歌を流せば反応があります(笑)。でも、地方には強い因習があつて、そう簡単に人々との壁が取れるというふうにはならないのかな、と思ったりします。

千田 そうですね。信仰に根付いた若者たちがまた世に奪われてしまふのではないかと思ひ、そういった方向に強く向かってしまった。でも考えてみれば、福音そのものをしっかりと核にしておけば、そんなことにはならないんで

すよね。その信仰が自分であれば良かったかなと、今更ながら考えさせられます。適度な視点を持つていけば、親の世代ももっと獲得していくことができたかもしれない。異教的な親の世代から守る、と考えてしまったけど、むしろ愛をもって親たちに接し、彼らを捕らえていく視点があれば良かったかなと思います。

池田 私たちの教会のある場は新興住宅街なので、みんなが外から来た人たち。どちらかと言えばインテリも多い。そして横浜だからミッションスクールも多い。キリスト教に対する抵抗や壁があまりなかったのです。PTA会長の3年が終わると、即、民生委員の推薦が来ました。これも大事だなと思つて3期9年間やったのですが、連合町内会長、市会議

員、学校長など、言うならば地域の有力者たちとの接点となっていました。これがまた地域に仕えるための大きなパイプとなりました。教会が地域に仕えるとき、地域の様々な階層の人たちとの関係作りができて、いろいろなところに波及し、伝道に繋がっていくんだと思います。やはり、人間は関係作りでより確かな接点を持たないと、問題を分かち合うことができない。どのようにすれば地域に仕えることができるのか、それがずっと私たちの課題であり、取り組みだったと言えます。

現在、私たちの教会では、保育園、フリースクール(チャーチスクール)、障害者の作業所、高齢者のケア、スポーツと、5つのNPO法人を取って地域社会との接点を持っています。毎年20〜30名の受洗者が与えられています。

ほとんどがそれらの働きでつながった方々です。コンサートや伝道集会もしますが、不特定多数というか、まったくつながり無しに来る人は珍しいですね。人間関係によるオイコス伝道が重要です。

千田 私たちは会堂が飽和状態になったことで区域礼拝や小牧者訓練を学び、さらにJCGIのパルナミニストリーのシステムを通して教会をセル化していきました。何のためのセルか、と言えば、新しい魂を捕らえていくため。クリスチャンホームを地域に對して開き、教会に来る前に、良い交わりの場、コミュニティを作るのです。私は、クリスチャンホームが地域にたくさん置かれていくということが、その地域にかなり大きな祝福をもたらすと信じています。(26頁に続く)

牧師には霊的メンターが必要



——伝道をしていくにしても、牧師が行き詰まっている現実もあります。その点をどう思われますか。

池田 いわゆるバーンアウト（燃え尽き）してしまう牧師ですね。私も中堅の牧師たちと関わってみてびっくりするのですが、表面的には元気で、実際に話をしてみると「薬を飲んでます」「医者に通ってます」というケースが多いのです。教会の中で深刻な問題を抱えている人たちと関わることによって自分自身も行き詰ってしまうという状況。そういう現実に対して、牧師が、先輩牧師などからコーチングを受けていくバルナバミニストリーや、霊的指導とケア

をしてくれるメンターの存在がとても重要になってきています。私自身も、最初は誰もいなかったのですが、役員との軋轢が表面化した時期がありまして、それを通してメンターを持つようになりました。役員に囲まれて糾弾されるなど非常に厳しい時期を過ごしたのですが、折りのなかで、主から「おまえは、自分が先頭に立って頑張ってるよ」と指導もしてきた。しかし、彼らは養われていない」と示されたのです。私は本当に、主の前にくずおれて悔い改めました。すると、役員の1人が謝罪に来てくれて、2人で涙の祈りをする事ができたのです。

私は常に一国一城の主になって自分主導で、という感じが強かったのですが、それではいけないと感じまして、「恵みの雨」という雑誌で紹介されていたある牧師に電話をかけ、無理やりメンターをお願いしました（笑）。その方には3年間、指導を受けました。そしてその後、教会成長研究所（JCGI）の推薦を頂き、そこでも様々な牧師・宣教師からア

ドバイスを受け、教会形成の土台をつくる事ができました。愛が結ぶ教会として「捜す愛」「仕える愛」「かけめぐる愛」「届く愛」の4つの愛のサイクルを掲げ、シンボルマークにもしました。教会員からすれば、自分たちはどこに立っていて、どこに向かっているのか、何をすれば良いのか、という基本的な方向性が明確になり、やる気と使命感が生まれてきました。礼拝も80人くらいだったのが5年間で200人に倍加して、そこから今度は宣教師を送り出すこともできました。これらは、私自身が他の牧師たちから指導とアドバイスを受けられるようになった結果です。

千田 バルナバに関して私がとても感謝したのは、川崎廣先生と神学生時代からの同期で、ずっと相互バルナバで歩むことができたこと。これは素晴らしい恵みだったと思います。いろんな局面に直面しても互いに相談し合い、支え合うことができました。それと、良いリーダーを頂くこ

とことができました。ミーコ先生、陶山先生という二人の霊的な巨人。とても豊かな霊的資産を受け継ぐことができました。それなしには、その後の働きは無いと思います。また、ミーコ先生はビジョンの方で、夢を語り、ビジョンを示してくれました。ビジョンを掲げ続けていくことがどんなに重要なことを学びましたね。

失敗談としては、神学校を卒業した二人の献身者が山形に戻ってきて、二つの開拓を担ってもらった時のことがあります。私は、その二人の若い牧師との関係をどう持っていけば分からず、本当に苦しんだ。私が苦しんだ以上に、おそらく若い二人はもっと苦しんだ（笑）。結局、一人は留学で去り、一人はいろんな都合で去って行きました。正直な話、ホッとしました。しかし、本当にその二人には申し訳なかったと思っています。その後、首都圏伝道の一環として、つくばでの伝道が導かれ、大喜多洋牧師が引き受けてくれました。学園都市ではなく衛星都市の牛久市で開拓を始め、これが私

ど、まさに「確実に」育てておられるということ。信徒のレベルを超えて、もう牧会者として建て上げて遣わす、というのがすごい。そういうふうにして何人も関東に送り込んでいます。先生には、教会増殖・開拓という召しを与えられているんですね。

——次に、日本宣教の希望・可能性について語っていただけますでしょうか。

千田 1995年だったかな、神様から「多くの教会を生み出す教会として用いる」と語られました。その直後にJCGIから、山形でネットワークによる教会増殖をやってみませんか、という呼びかけがあり、5つの教会が参加してネットワークによる教会形成をしました。その時、指導してくださったロバート・ローガン先生が、「山形で試験的にやるけれども、これは将来、日本全国にネットワークが増殖して、日本全体の宣教に向かうための試みなんだよ」と言われました。



山形で3年1期やって1年休み、1期だけじゃよく分からないというところで2期やって、その後、沖縄と北海道でネットワークが始まり、私たちは手分けしてバルナバとしてそこに仕えていきました。ちょうど航空会社が超割を始めた頃で、北海道に行った足でそのまま沖縄に行くというのをしました。私は、飛行機から日本列島を見ながら、「神様は必ずこの日本をネットワークで覆っていくのだ。一本釣りの時代から、網で漁る時代をもたらしてくださ

る」とのビジョンを持ちました。不思議なことに、次の年には私の教会でも4つの開拓がスタートし、ネットワークに参加しています。今は8つのネットワークが全国でなされていますが、バルナバ役がもつとすれば、すぐにでも幾つか始められます。実は、日本ほど面白いところはない。99%の未開拓地に向かっているわけですから。

池田 話があるじゃないですか。アフリカに靴を売りに行った二人のセールスマンがいて、誰も靴を履いていないのを見て、一人は「誰も履いていないから可能性ゼロです」。もう一人は「この人たちがぜんぶ履いたら素晴らしい。可能性100%です」（笑）。視点を変えれば可能性は無限大。それにはやはりビジョンだと思いませんか。ビジョンがはつきりしていれば、そこから方法はいくらでも生み出されていく。

私も、使徒の働き2章にあるベントコステの日に3千人が救われた記事を読んだとき、それがすっ



池田 千田先生が素晴らしいと思うのは、就職や転職で出て行く人を「確実に」と言われましたけ

（笑）。

一本釣りから網で漁る時代に

すなど



と心に入ってきました。これは時代を超えた普遍的な教会のモデルだ、と。そこで私たちは「ミッシェン3000」という三千人の教会を目指すことになりました。

その後、試練を通して神だけに頼るということを選び、今のダイヤモンドチャペルの献堂に至りました。やはり、明確なビジョンを持つなかでしばしば壁や問題にぶち当たりますが、それがまた恵みと祝福の窓口になっていきます。

また、毎年一月にはビジョン礼拝を持つのですが、そこで教会に必要な奉仕をプリントにして配り、一週間折って、自分はどう

やって主に仕えていくのかを決めてもらいます。頼まれてではなく、自発的に折って。自分の重荷と召命で取り組みますから、積極的になりますね。

千田 それからやはり、聖書そのものからリーダーを育てていかなければならないと思っています。インドで宣教師をやっていた人が話してくれたのですが、イスラムの神学校では、小さい子供から20歳くらいまでの神学生が徹底的にコーランを読み、コーランとコーランの第一解説書を完璧に暗記するそうです。その上で世界に遣わ

していく。もう、コーランも何も手にしていなくても全部頭の中に入っている。私は、日本の教会学校なんて遊びのようなものだ、と思わされました。

ダニエル・プロジェクト。ダニエルがバビロンに連れて行かれた時は15歳前後でしたが、あれだけの資質を身につけていた。信仰の家族とユダヤの共同体が一つになっただけという訓練をしていたのです。一人のダニエルを育てること、バビロンのトップリーダーとなる。そういう人材を作り出していくことが必要です。日本のリバイバルを叫ぶだけでなく、実行できる人をいかに生み出していくか、ということですね。

池田 「日本は宣教師の墓場」とも言われるけど、その日本で新しいことをやっていく。そして、こういうことをやろうとしているんです、と言ったときに何かが開かれていく。

千田 墓場こそ復活の場です(笑) 今、そういう兆候があらこちらに出始めていますね。

池田 そう、必ず主は起こしてくださる。可能性は無限大です。